

---

# VaNTo

芦川気白

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

V a N T o

### 【Nコード】

N 1 0 2 5 Z

### 【作者名】

芦川 気白

### 【あらすじ】

桜が舞う中騎士団に入りたいという真澤火願。騎士団がいる屋敷の大門にやってくるが一人の青年に会う。一体全体そのひとは騎士なのか…。そして、屋敷に入るとそこには初めてみる風景が。総長に会い、自分が騎士になりたいと言う理由を話す。すると、総長が発した一言に驚く火願。果たして、火願はどうすることか…。

## 桜舞う季節(?)

騎士は誇りのため、誇りを守ることを決意した軍人のこと。  
始まりは桜吹雪舞う如く春のこと…。

騎士達は集結した。

月明かりに照らされて騎士団はそれぞれ誇りのために刃を交える事になる  
…。

## 第一話：桜舞う季節

ウガノマチ  
羽芽野街中心部。ここに大きな屋敷がある。

そして、そこには騎士達はいた。

俺も騎士団に入りたい  
…。

そう。俺には守りたいものがある。だから俺は騎士になる。

俺の名前は真澤<sup>マサワ</sup> 火願<sup>ヒガン</sup>。

桜が舞う中、俺は心に誓った。

四月一日。

俺は騎士団がいる屋敷の外にある大門を前にしていた。桜の香りがしたと同時に俺は自分よりかはるかに大きな門の扉を二回ノックした。

「こんなんじゃ誰かくんのか…?」

小さく呟いてみた。近づいてくる足音も、喋り声も聞こえない。

「留守…!?!」

眉間に皺を寄せてしまった。それから舌打ちをして、大門に背を向けてしまった。

カタツという音が大門の方から聞こえた。

しかし振り向いても大門が開く気配はなかった。

「んだよ…。期待はずれかあ…。」

ため息をついた。そして再び大門に背を向ける。

「期待はずれって迎えに来てやった俺に対する言い方がよおっ!!」  
大門の上の方から聞こえた謎の声。男…の子!?

とりあえず、大門の屋根つばい所を見るとそこに、着物つばいのを着た目の大きい青年が立っていた。何故あんな高い所にのれたのだろう…。

（もしかして騎士!?!）

俺は少しそこにいる青年を無言で見ていた。

「んだよっ!?!」

青年が俺に問いてきた。それはそうだろう。俺は無言でいたんだから。

「…っあ、えゝつと…。俺、騎士になりたいんだ!!だから此処に…」

青年の問いに答えている途中で青年が口を挟んできた。

「騎士いゝ!?!ああゝ。入れてやるから、ちよつと待ってなあゝ!」

青年が門の屋根の上から消えた。いや…、落ちていったという方が正しいか…?

少々時間はとつたがこれでやっと俺も騎士になれる。俺の心の中はお祭り騒ぎ。そう思っていると大門がゆっくりと開いた。大門はギシギシと音をたてている。結構古いのだろう。

「おいっ!!入れっ!!」

門を開けていたのは、あの青年たった一人だけ。

（体は小さいのに力はあるんだな…。）

俺は大門を潜り抜け、目の前にはあの騎士団が住む屋敷があった。俺はずっと、あの大門の外でしか見てなかったけれど、いざ目の前

にしてみると、かなりスケールが高く感じて訳も分からず、緊張してしまった。俺が大門を潜り抜けた時、すぐに大門は閉じられた。閉じる時も同じようにギシギシと音をたてていた。

俺は青年に問いかけた。

「あんたはどうして大門の上に上れたんだ？ジャンプ力半端ないのか！？」

青年は大門を挟んでいる壁の一つを指差した。そこにははしごが置いてあった。

「あれを使って大門にのった。」

青年は当たり前のように答えた。俺は思わず青年にツツコミをいれてしまった。

何だあ、それっ！？はしご使ったのかよっ！？」

という、聞きなれているようなツツコミを。

「悲しいツツコミだな…。」

呆れたような口調で言われてしまった。確かに自分でツツコンどいて結構悲しいツツコミで終わってしまった。

気を取り戻して俺は青年についていった。

青年は屋敷の戸を開け、屋敷の中に入っていった。俺も後へついていった。しばらく長い廊下を歩いた。庭が見える。桜の木もあった。風と共に桜が一枚、一枚香りを放ちながら舞っていた。

俺は立ち止まり、それを見ていた。

「何やってんだよお！？さっさと来いっ！」

青年の怒鳴り声が聞こえ我に返るように歩き出した。

青年は一つの部屋の前で足を止め、戸を開けた。

「総長っ！！騎士になりたいって奴いたから連れてきたぜえ！？」

中に偉い人がいることが分かった。俺は部屋に入らず、その総長って人に一礼した。

顔を上げると総長がにっこりしていた。

「入りなさい…。」

総長は俺を部屋に入れた。いや、入れてくれた。部屋の戸が閉まる音。戸の向こう側であの青年がいた。青年は戻っていった。

目線を変えて総長の方に目線を移動した。

「えっと、俺、火願。真澤火願っていいます！！騎士になって弟を守りたいんです！！だから…」

途中で言葉が途切れてしまった。

俺には、弟がいて歳はもう十になるだろう。俺の八つ下だ。とても病弱な弟ですぐに体調を崩してしまう。ある日、そんな弟が恐ろしい病におかされてしまった。医師からは、およそ5年の寿命と告げられた。だから、俺は弟を守りたいんだ。

いや、守らなきゃならないんだ。兄として…。

総長は微笑んでいた。なぜ、微笑んでいるのだろう。

「弟さんのために君は騎士になりたいんだね…。」

俺を真っ直ぐ見て総長は言った。

「はいっ！！」

俺はすぐに答えた。

「いい決心だ…。けど君、刀で人を斬ったことはあるかい？」

「…。」

人を斬ったこと…。俺は刀を持っているだけで斬ったことはなかった。

「では…君がどれほどの男か、確かめることにしよう…。」

総長は俺に戦えって言ったのだろう…。

「その刀が君の飾りじゃないことを祈るよ…。」

総長は俺にそう言うってから立ち上がり戸を開け庭へ行った。俺も部屋から出て庭へ行った。庭には、大きなあの桜の木があった。いつ見ても綺麗だな…。

って考えてる暇なんてない。

「刀を交えるのはいいけど、相手は誰なんですか…？まさか、総長なんてないですよね…？」

初っ端から総長とは戦いたくない。絶対に負けてしまう。だから強い人とは戦いたくない。

（んっ！？俺は自分に甘えてんのか…！？）

弱い奴と戦いなんて、戦士として、騎士として持つてはならない心だ。

強い奴と戦わなきゃならないのに…。

「狼河君<sup>ロウガ</sup>。来なさい。」

総長が狼河<sup>ロウガ</sup>って人を呼んだ。総長が戦うんじゃないのか…。狼河って誰なんだろう…。

俺の目の前に現れたのは背が小さく目が大きい、俺を屋敷に入れてくれたあの青年だった。

（あいつ…狼河<sup>ロウガ</sup>って言うんだ…。）

「よぉー！！また、会ったなー！！」

狼河は陽気に俺に挨拶をした。

「真澤火願<sup>マササキカゲン</sup>っ！！よろしくっ！！」

「狼河氷元<sup>ロウガヒヨウゲン</sup>っ！！刀を構えろっ！！新人さんっ！！」

狼河氷元。青年の本名だ。

俺は言われるがまま、鞘から刀を抜いた。両手で刀を持ち構えた。

「氷元<sup>ヒヨウゲン</sup>って言ったか…。構えろよ…刀。」

俺は氷元に刀を抜かないのか聞いた。

氷元は刀を抜かなかった。

「俺がお前ごときに刀あ構えると思うか？ふざけんなっ！！なめてんじゃあねえぞっ！！」

氷元はそう言う俺に向かって走って来た。

俺は刀を力いっぱい握り締めた。

「あれが新人さぁん…？」

俺と氷元の戦いを見に来たのか知らぬ間に廊下に人…いや、騎士が

たくさんいた。

たくさんといっても五、六人。

「新人さんだね。あの人。見たこと無いもーんっ！」

問いに答える一人の騎士団員。

でも、今俺には関係の無いこと。戦いに集中しなくちゃ。

走ってくる氷元。俺は氷元の腹部に突きをいれようとした。しかし、氷元に刀が刺さった感覚がなかった。と、同時に俺の右腕に激痛がはしった。

氷元が俺の攻撃を避け俺の右腕に蹴りを繰り出したからだ。俺は刀を離し数メートル突き飛ばされた。

「ぐはっ!？」

痛みを堪えながら立ち上がり氷元に視線をおくろうとしたら目の前に刀の刃先があった。

俺の刀を氷元が持っていた。俺の目の前にあるのは、俺の刀の刃先だった。

「分かったらあ…。お前の持つてる力がよおっ!？まだまだ、なんだよおっ!！」

氷元は俺に説教をした。

「ってことは俺…、騎士になれないのか…？」

俺は不安だった。氷元が俺に刀を渡してくれた。俺は刀を鞘に納めた。

総長や周りで見ていた騎士達が俺の方に近づいてきた。

俺は下を向いてしまった。

(騎士になりたかったのに…。俺は負けた…。)

弱気になってしまった。

「真澤君。」

総長が俺に向かって静かに言った。

俺は総長を見た。騎士達は微笑んでいた。俺をからかっているのか…。

総長は俺の手を握った。



「立派な騎士になりなさい…。」

「えっ!？」

俺は啞然としてしまった。

「俺が騎士に!？」

俺は氷元との戦いで負けたのに…何故？

「そうだよ。君は我々の仲間だ…。」

「仲間あ!？」

俺は少し嬉しい気持ちと意味の分からない気持ちでいっぱいだった。  
「んああっ!？んでだよっ!？総長っ!？こいつは俺との戦いで負けたんだぞおっ!？んで、こいつを騎士にするだあ!？なんのために俺を…。」

氷元は俺が騎士になるのを否定しているようだった。総長はため息をした。

「彼は刀の使い方は少しすれぱすぐ、上手くなる。何よりも瞬発力と反射神経が優れているからなっ!」

総長は俺の戦いっぷりを少し褒めてくれた。

しかし、氷元は俺と総長に背を向け歩き出して行った。何処へ行くのだろう…？

俺はそんな氷元の背中を見ていた。

すると、騎士団員の一人が俺の手を握った。

「えっ!？」

俺は驚いた。なんだって俺の手を握ったのは白くつやのある髪の色をした背の低い女…の子だったのだから。

「とりあえず、入団おめでとっ!！新人さんっ!」

女の子はニコツと笑ってくれた。

「氷元はノリの悪い奴だから気にすんなよっ!」

騎士団員の金髪の背の高い男性…が俺の肩を軽く叩いて言った。

「どうも…。」

俺は二人にひかじめにそう答えた。

すると、手を握ってた女の子が手を離し、一歩だけバックステップをした。

俺はその女の子を見ていた。

「私は斎花風<sup>イツキカフウ</sup>。よろしくねっ!!」

女の子は俺の方に向かってピースをした。

俺はその、花風にニコツと微笑んだ。

「よろしく。俺は真澤火願。」

「火願かあゝ。ふゝん…。よろしくっ!」

花風は何か、元気な子つてことが分かった。まっ、誰だつてこの子を見てるとそう思えるよな…。

つて考えてるとさっきの金髪の背の高い人が俺の背中をバシッと叩いた。

「つて…!?!」

つい、俺は声を出してしまった。

「俺様は雷乱だあつ!!よろしく頼むぜえっ!!」

ニカツと笑っている。雷乱…?少し変わった名前だ。低い声。いかにも男性つて感じた。

「よっ…。よろしく…。」

俺は背中を叩かれ、少し体が震えた。

「総長っ!!今夜は火願<sup>コイッ</sup>の入団祝いに皆で一杯どうですかあっ!?!」

俺の肩にポンツと手を置いて雷乱がニカツとした。俺はどうすればいいか分からず、雷乱の目を横目で見ていた。

その目は俺を歓迎しているような強い目つきだった。少し嬉しかった。

総長は大きく頷いた。

「ああ、今夜は総騎士幹部長と総騎士幹部副長を呼んで真澤君を祝うとするかっ!!」

俺はやっと正式に騎士として認めてもらえる。心の奥底で思った。

（第一話）桜が舞う季節（？）：完：

## 桜舞う季節(?)

### 第一話：桜舞う季節(?)

「だったら、<sup>イツキ</sup>斎君。君は、<sup>ナンベ</sup>南部君と<sup>ヒナクラ</sup>日名倉君、それと<sup>コクジヨウ</sup>黒城君、<sup>チヒロ</sup>千尋ちゃんにそのことを知らせて来てくれないかな？」

<sup>カフウ</sup>総長は花風に微笑みながらそう問いた。すると花風は持ち前笑顔で頷いた。

<sup>ライラン</sup>総長は続けて雷乱を見た。

「<sup>ヤリエ</sup>槍枝君には、<sup>ツルギ</sup>鶴来君と<sup>ロウガ</sup>狼河君、<sup>リマ</sup>梨真ちゃんを呼んで来てほしいな。いいかな？」

雷乱は勢いよくガッツポーズをした。

「いいに決まってるんだろっ！任せとけいっ！」

雷乱は俺を見た。

「お前さん…いや、<sup>ヒガン</sup>火願はどうすんだあ？」

雷乱が俺の名前を呼んでくれた。

少し、騎士団の中に踏み込めた気がした。

さらに俺は嬉しくなってしまった。

「<sup>マサヲ</sup>真澤君。君には私がこの屋敷の案内をしよう。この屋敷は広いからねえ…。これまたドツコイっ！すぐに道に迷ってしまうんだよ…。アハハハハハっ！！」

総長は自慢のできない事を自慢げに言う。少し笑えた。

花風と雷乱は屋敷の中へ入っていった。俺は、総長に言われた通り、屋敷の案内をもらうことにした。

「まずは、広間からだなっ！真澤君。ついてきたまえ…。」

総長は屋敷の方へ、広間の方へ向かって歩き出した。俺は、総長についていった。

かなり長い時間、俺は、総長と共に廊下を歩いていた。

（もしかして　…！？）

「あ、あの…、総長？もしかして…、道に迷ったとか…ないですよ？」

俺は恐る恐る総長にそう尋ねてみた。すると、総長は…。

「いや…。迷ってはいないぞ…。」

苦笑いをしている。迷っていないはずはない。

広間には、まだ着かないのだろうか。

それからというものの俺は、数分して広間に辿り着いた。

「此処が広間ですか…。」

俺は少し、立派な造りの広間に驚いた。ここで、騎士団の偉い人達が食事をする。俺も、今夜此処で騎士団の偉い人達と食事をする。

「どうだい？この広間は。立派だろー！！」

総長は自慢そうに俺を見た。

「はい…。立派です…。」

俺は、広間を眺めて言った。

すると、広間の外で誰かがこっちに向かってくる足音が聞こえた。

「そ　　ちょ　　っ！！」

この声は…。いつでも明るいいあの子…。

「齋君かぁ。どうしたんだい？」

やっぱり花風か。総長は花風を見て微笑んだ。障子戸の向こうには花風がこちらを向いて立っていた。

「花風。なんで広間ヨコにいるんだ？」

俺は、花風に尋ねた。花風は横目で俺を見た。

「将刃ショウハとトーアちゃんと黒城と千尋ちゃんに連絡終わったから、そーちよーに伝えにきたの！！」

花風の顔は微笑んでいた。

（花風ってよく笑うよな…。）

俺は花風に会った時からそう思った。明るくて元気があって、変なところで男っぽい。でも、きちんとした、列記とした女の子って…。

総長は俺と花風を見て笑い、広間を後にした。  
花風は俺を見て微笑んだ。

「広間まで行くの、結構歩いたでしょ？」

広間の床のあたりを見てから花風は視線を変え、遠くの方を見た。  
俺には花風が見ている遠くの方がよく分からなかった。

「ああ。総長さんは、方向音痴だな…。」

俺はそんな総長の方向音痴さに呆れていた。多分、花風も同意しているだろう。花風も呆れ顔を見せていた。

「火願はこれから何か用事でもある？」

「あつ…、いや、俺はとくに…。」

新人だからやることがわからない。それに俺は、この後、夜月が昇ってからしかとくにあれやれとかは言われていない。

「それじゃあ、これから、私とお散歩しない？雷乱さんも黒城さん達も巡察やらでどっか行っちゃったし！！…で、お散歩を火願と行きたいんだけど…いい？」

花風の大きな瞳が俺を見てきたのが分かった。俺は意味も分からず息を飲んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1025z/>

---

VaNTo

2011年12月5日20時54分発行